
べ、べつに異世界に転生して女の子になってハーレム作りたかったわけじゃないんだからな！

佐倉風弦

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

べ、べつに異世界に転生して女の子になつてハーレム作りたかつたわけじゃないんだからな！

【Zコード】

Z7098X

【作者名】

佐倉風弦

【あらすじ】

俺は、桜下リナに告白したが振られてしまう。リナは何と同性愛者だった！ 悲しみにくれながら帰る途中、突然目の前が真っ白になり 目を覚ますと俺は異世界に転生していた！？ 俺を転生させたラルド王国の国王は戦争のためどうしても異世界の者の力が必要らしく、俺の世界で悪く言えば大量虐殺、そしてこの世界へ大勢を転生させたと。

何か最強みたいで、嬉しいよ？ 嬉しいけど…… 何で俺、女の子

なんだらうね？

もはや元の世界に戻る術もなく、俺は戦いに身を投じる。そして、
出合つたのは転生した だつた。

プロローグ

「すみません。私……男の方は苦手なんです。その……女の子が好きで……」

学校一の美少女と言われる桜下リナに告白した俺は見事に振られてしまつた。

目の前に見えるのは申し訳なさそうに頭を下げる完全なる美少女。彼女の桜下トという苗字にちなんで告白する場を桜の木の下を選んだんだけど、今となつてはムードも何もない。

それにして 男は苦手? 女ならいいのか?
できれば考えたくないけど、桜下リナは同性愛者と云ふことで……その事実は俺にとつてあまりにもショックだつた。

悲しみにくれながら帰路を歩くこととなつた。

赤みを帯びた空には沈みかける夕陽が見える。なんて言つが、あの美しさが傷付いた身に染まる……。ああ、胸が痛い……。

桜下リナが女の子を好きなんて……。

……もし、生まれ変わつて俺が女になつたとしたら、俺のことが好きになつてくれるんだろうか……? いや、性別で好きか嫌いか決まる愛なんて……。

そんなことを考えながらボンヤリと歩いていくと、目の前が真っ白になつた。

「え? ？」

「めんなさい。本当に」「めんなさい……。

声が聞こえる。申し訳なさうな、悲しそうな声……。

何が起こうっているのか分からなかつた。

何で、田の前が真っ白に？ この声は何で謝つてるんだ？

「めんなさい。力が……人が……必要なんです。この世界での、あなたの人生を奪つてしまつことをどうか……どうかお許しください。

ゆつくつと視界が暗くなつていき、ついには何も見えなくなつた。

第一論

目を覚ますと真っ白な天井が見えた。白色なせいか清潔感を感じる。

背中にはふわふわした感触……ベッドの上か？ うん、多分ベッドの上だ。

とりあえず起き上がり、部屋のなかを見回した。
豪華なテーブルやソファが並べられたまるで貴族の屋敷の一室みたいだ。

何だよコレ？ 僕の知り合いに金持ちはいなかつたはずだけど……。

「ん……？」

何か身体に違和感を覚えた。

今までになかった……ちょっと胸のあたりがボリュームを増したような……。

恐る恐る胸に手を当ててみると。かすかな……ホントにかすかだけどふくらみがある。

……俺、男だったはず……。あれ？ 胸にふくらみがあるだけじゃなくてアレがない……。いや、具体的に何とは言わないけど。これは……？

一体何が起こってるのか理解できず焦るばかりだった。

そんななか、部屋の扉が開いて一人の少女が姿を現した。

ピンク色の長い髪に尖った耳……あと、何ていうか説明しにくいけど……えーと、あれだ。何かスクール水着とメイド服を統合したような衣装。

尖った耳なんかを見る限り、人間じゃない……。ここは夢のなかか？

少女はスタスターと二つ並んで、ベッドの隣で立ち止まるところにこりと微笑んだ。

「お田覗めになられましたか？」

「……えつと、どこなんだ？」

「電子と魔法を有する世界……テファルワールド」

「テファ……？」ファンタジックな名前だなそれ

「ええ。だってこの世界は、あなたのいた世界とは違うんだですから

「へ？」

少女の言葉が理解できずに固まつた。違う世界？ 何が何だか理解できない。

俺の様子を気にする風もなく少女は続ける。

「あなたは、一度死にました。そして、この世界に転生しました」「はっ！？」

少女は黙つてポケットから手鏡を取り出し、差し出してきた。それを受け取り、恐る恐る覗き込む……。

「あ、れ……？」

そこに映つっていたのは、短い金髪の少女……。まさか、これが俺か？

いや、原型は留めてる。だからいい、すぐに自分の姿であると分かつた。本当に、転生したのか？

これで桜下リナとキャツキヤウフフできるぜ！ とはいかない。それが本当に起こっているなら俺と彼女がいるのは別世界。

「私は、エルナと申します。あなたの名前は……セオです。国王様

から送られた名前です

「セオ……」

「あなたこは、このマールデアラングの騎士として戦つてもういたいのです」

「は……？」

つまり、俺が転生せられたのは戦争にでも行かされるためなのか？

そんなの勝手すぎるじゃないか。

「せよ！」

「それは無理です。既にあなたは、あちらでは死んだことになつてしますから。あと……どうしてもあちらの世界の人間が必要だつたんです。この世界はあちらの世界より脆いですから……。あちらの世界にいた人間は強い力を発することができるんです。重力だつて違いますし……」

「なつ……そ、そんなの……いきなり言われたつて……」「すみません……」

エルナは申し訳なさそうに頭を下げた。

「少し休んでいてください。私は廊下にいますから、落ち着いたら呼んでください」

言い残し、エルナは部屋を出て行く。
ベッドに寝転び、天井を見上げる。

もう帰れないのか……。

じゃあ、桜下リナにも会えない。

……こんなことなら、もっと積極的にアピールしてたら良かつた

なあ……。

もしかしたら、桜下リナも同姓愛者じゃなくなつて……俺のこと好きになつてくれたかもしれないし……。

このまま何もしないでいても、ただ時間が過ぎていくんだらうな。こつちに桜下リナに似た女の子もいるかもしれない あ、俺女なのか……。

……くそ、帰れないならこのままいたつて仕方ない。

あれだ、戦つて有名になつてハーレムでも建設しよう。それがいい。

あ、いや俺女になつたし……男を侍らせるのは今まで男だつただけに抵抗が……。女の子を集めて百合百合展開……でもそれは変な方向に踏み外しそうだしな。とりあえず、有名になつて金持ちになつて豪邸でも建てよう。

思い立つたら即行動。俺はベッドから出ると部屋のドアを開けた。廊下に立つているエルナに声をかける。

「エルナ……だつけ?」

エルナ……多分エルナだつたよな? あ、エルシーの氣もしてきた。

エルナはこちらに振り向くとにこにこと微笑んだ。

「何でしよう? セオ様」

「んーと……一応、戦うよ。まあ、他にできることなぞやつだしさ」「そうですか。では国王様に挨拶を……あ、その前に」

エルナが一旦部屋に入ると手招きするから俺も部屋に入つた。豪華な赤色の引き出しからエルナが取り出したのは、青色の変わつた服と下着だった。

こちらに差し出してくる。

「これ……」

「騎士用の制服ですよ。軽装なので動きやすことです。鎧は重いでしょ？」「

「確かに……重そうだよな

服を受け取ると、エルナは「廊下で待つてます」と言い残して部屋を出て行った。

俺は服に手をかけ、ぴたりと手を止める。

下着……。

「これ、履くのか？ 何て言つか、すぐ恥ずかしいって言つか……」

…

今まで男だったから、すいに抵抗があるんだけど……。
ど、どうすればいいんだよ？

恥ずかしさを堪えて着替えた俺は、廊下に出る。エルナがにこりと微笑み、

「では、参りましょうか」

「あ、ああ……」

うーん……何か妙だなあ……。

女になつたからつて、女みたいな喋り方するのは何か嫌だし……。てか、そんなことしたら俺、絶対キモイに決まつてる。まあ、喋り方は人それぞれだしこのままでも大丈夫か。

真つ赤な絨毯がしかれたいかにも豪華な雰囲気をかもし出す長い廊下を歩き続けた。

この廊下長すぎだろ……。

広すぎるつてのも疲れそうだな。俺が豪邸建てる時はこの辺も気をつけてあんまりでかすぎないようにしよう。

他の部屋も十分に豪華なんだけど、王室はもう桁違いだった。

赤い絨毯はもちろん、女神らしきものの石像が四体もある上に天井にはキラキラ輝くシャンデリアがいくつもぶら下がり、中央の玉座は宝石と金で装飾が施された真つ赤な椅子だつた。

そして、国王というのが すごい美人だつた。

美人と言えば、大方分かるだろうが女だつた。国王と言つより女王と言つべきだとも思つけど皆国王って呼んでるから国王といつことにしこり。

輝く黄金色で流れるような長い髪、アクアマリンの如く綺麗な瞳に何気に露出度が高めのいくつもの豪華な布を使つたと思われる深

海をイメージさせる蒼いドレス。

もはや……「イツ美人じゃないし、とひがむ隙も与えない　絶世の美女がそこにいた。

まあ……桜下リナよりは下だけどな。いや、ほんと。国王は椅子から立ち上がるとにこりと微笑んだ。まるで女神のような……。

「はじめまして、セオ。私が国王、セラグリムよ。よろしくね」「よ……よろしく……」

国王だからもつと丁寧な言葉を使つてくれると覚悟していたが、そつでもなかつたので思わずうろたえてしまった。

「エルナに聞いたと思うけど……このマールティアランドは、隣のデファレフ王国と戦争をしているの。けど、デファレフ王国の力は強大で……こちらは、小さな国だから人口も少なく兵もあまりいない。だから……異世界からあなたを……いえ、あなただけじゃないわ。大勢の人間をこちらに移したの。あちらの世界はこちらより頑丈で働いてる力も強い」

「え？」

正直、話が理解できない。あっちの世界が頑丈？

セラグリムは、こっちが混乱しているのに気づいたようだ。

「そうね。この世界に来てから身体が軽くなつた気はしないかしら？」

「そう言われてみれば……」

「試しに……エルナ、あれを持って来て」「は、はいー」

慌ててエルナが運んで来たのは、木の板らしきものだ。
これが何だというんだろう？

「これをパンチで割つて……いえ、チョップで十分ね
「チョップで……」

普通、国王がパンチとかチョップとか言うか？
そこはあまり気にしない方がいいのかな。
とりあえず、言われた通りエルナが持つ木の板にチョップをかま
すことにした。

「ていつ」

木が割れる独特な音が響き、真つ一についた。

「え……？」

いや、普通は木の板でもチョップで割つたりできないはずだろ？

「ちなみにそれは、特別固い木よ。分かつたでしょ？ この世界
は、あちらより重力が軽い。この世界より重い場所にいたあなたは、
こちらでは強い力を發揮できるの」

「…………」

つまり、あっちの人間がこっちに来ると強いつてことか？ そつ
いふことだよな。

「いきなり戦争に行けとは言わないわ。あと、手をかざしてみて
「手を？」

言われた通りに手をかざしてみた。

すると、丸い緑色のウィンドウのよつたものが現れる。

そのウィンドウには、俺の名前 セオという文字が浮かび上がつていて他にも項目があった。

『魔法』『持ち物』。

「魔法の項目は、使える魔法のリスト。持ち物は今持つてる武器とか道具のリスト。それぞれの項目をタッチして目当てのものを選んでタッチしたら魔法を使えたり、物を出現させることができるから」「ん？ 魔法って手から出したりするんじゃないのかよ？」

「マールデアランドは電子の国よ？ 魔法も武器も電子で形成されてるの。このおかげで、本来魔法を使えない……魔力の持たない者にも魔法を使うことが可能。他の国では、異世界の人間に魔法の力を与えることはできないわ。人間には魔力がないんですもの」「そ、そつなのか……？」

異世界なのに電子かあ……。
何か妙な気もするけど……。

「それにしても……セオって可愛いわね」
「はつ……！？」

予想外の言葉に思わず固まった。
えーと……この人国王だよな？ 国王がこんな簡単に可愛いとか
言つのか？

「ねえ、エルナ」
「はい。何でしう？」
「食べていい？ この子やつちやつていい？」
「いや、俺は女……だし……」

もしかしてセラグリムは……百合百合だつたりするのか?
見た感じ、旦那さんがいる感じはしないし……。
そういう……。

「ダメです。そんな」として、セオさんが戦ってくれなくなつたら
どうするんですか!?」「

ふくつとほっぺを膨らませて怒つてゐるらしいエルナ。
戦つてくれるなら、いこつてことなの?か?

いやいや……。

「う……それもそうね。勿体ないけど……百合ハーレムの子達で我
慢するわ」

「百合ハーレム……?」

百合ハーレムって、そのままの意味なんだろ?な……。

「やうやう。私は、普通に男を集めたハーレムと女の子を集めた百
合ハーレムを持つてるのよ。性別なんか関係なくどつちでもいける
からね」

一応、セラグリムがいろいろやばい奴だつてことは分かつた。

「私の娘を紹介したいところだけど……」

「セフィーナ殿下は町に出かけておつます」

「そう……」

娘いるのか!?

この人の娘かあ……。

なら、やつぱり美人なんだろうけど……中身は……考えたくない。
何だかなあ……。

「あ、そうだ。エルナ」

セラグリムは何かを閃いたようにパンと両手を合わせてエルナを見る。

エルナはさつと姿勢を正す。

「何でしょう?」

「セオに町を案内してあげなさい。来たばかりでアレだから息抜きも必要でしょう? あと、その後他にもセオと同じ世界から来た人間を紹介してあげて?」

「は、はい!」

そう言えば、他にも向こうから来た人間がいるんだっけ?

それなら、会ってみたら気が楽になるかな?

知り合いとかは……いるんだろうか……。

俺は少しだけ、まだ見ぬ仲間に思いを馳せた。

エルナに連れられ、町に出た俺は驚きを隠せなかつた。

もう今まで見たことのない、ファンタジックな町並みが広がつていた。

レンガ造りの家が立ち並び、様々な武器や道具を売つてゐる店…きれいな外装の教会だとあつちの世界では曰にしたことのないもので溢れていた。

戦争中とは思えないほどの賑わいを見せてゐる。この町に住む者達もやつぱり人間ではなく耳の尖つたエルフとか背中に白い羽を生やした大人や普通の人間と変わらない容姿を持ちながら獸の耳と尻尾を生やした獸人なんかが溢れかえつていた。

一通り町のなかを回つた後、エルナが笑顔で声をかけてくる。

「町はずれの方へも行きましょつか?」

「何があるのか……?」

何もないなら、わざわざ行く必要はないと思つし……。にこりと笑顔で。

「はい。海があるんですよ? キレイなんですよー」

「海か……」

海なら向こうの世界にもあつたけど見るのもいいかな。

町はずれには、広い砂浜があつた。

さらさらした砂が明るい太陽の光を浴びて輝く向こうに広大な蒼い海が広がっていた。

素直にきれいだと思った。

海は、向こうとそんなに変わらないんだなあ。あ、いや、こっちなら海のなかに魔物とか住んでるかもしけないけど……見た目はって言うの？ 何かおかしいな……。

そんなことを思つていると、悲鳴が聞こえた。

「え……？」

何だろ？……行つた方がいいのかな？
もしかして、誰かが魔物か何かに襲われてるのかもしれない。
俺はすぐにエルナに確認する。

「どこから聞こえたつけ？」
「あっちです！」

エルナが指差したのは、すぐそこに見える森の入り口だった。
確かに森のなかなら、魔物とかいそうだしな。

急いで森のなかへと向かう。

木々がうつそうと生い茂り、日光を遮る森のなかは薄暗く不気味な雰囲気が漂つていた。

邪魔な草を搔き分けつつ、奥へと進んで行くとき神秘的な泉がある空間に出た。

その泉の前で一人の少女が魔物に囮まれていた。

牛の出来損ないみたいな形の魔物はフンフンと鼻息を吐きながら少女をじりじりと追い詰めていた。

彼女の後ろは泉で、これ以上下がれば落ちてしまつ。周囲を魔物が囮んでいるせいで逃げ場はなさそうだ。

「えっと、武器出すのってどうやるんだっけ…？」

「ウインドウを呼び出して持ち物をタッチしてください…！」

エルナに言われた通り、ウインドウを呼び出し《持ち物》をタッチ。持っている物のリストが表示される。

再びエルナに向き直る。

「次は！？」

「その炎豪刀をタッチしてください…！」

「了解…！」

炎豪刀をタッチすると、目の前に赤い光が出現し、炎のように紅い刀身の刀に姿を変えた。

宙に浮いたままのそれを掴み、魔物に斬りかかった。

牛のような身体が真つ二つに切断され、断末魔が上がる前に光の粒子となって跡形が残ることなく消え去った。残りの魔物も同じ手順で葬つた。

どうやら本当にこの世界では強い力を發揮できるらしい、難なく魔物を倒すことができた。

「だいじょ おつと…？」

声をかけようとした途端、少女はこちらに飛びつくよつと抱きついてきた。

……恐かったのか。

……そうだよなあ……。

正直言うと俺も思わず泣きそだつたし……。

その少女は、向日葵のような黄金色の髪を背中あたりまで伸ばし、アクアマリンのような瞳に黒色の魔道師の服っぽい上着とマニスカ。そして……尖つた耳。

何て言つが、すこい可愛い子だ。

「あつがとつじでこますーあの……お名前をお聞きしていいですか?」

「お、俺はセオ」

「セオ様ですね。あなたのような勇敢な方に助けてもらつて……私は幸せです」

「そろそろ離れ……」

「セオ様。どうか私をあなたの元に置いてください」

「……俺は、女なんだけど……」

何かまづい方向にいつてゐる気がする……。

「性別なんて関係ありません。愛があれば」

「愛はないよ」

「王女殿下、その辺りで……」

「え?」

王女殿下?

今、エルナは確かにそう言つたはず。

じゃあ、この子があのセラグリムの娘なのか? 確かに外見も似てるし中身も 何かしら受け継いでそうだ。

少女は不満そうな表情でよつやく離れてくれる。

「あら? ハルナもいたの?」

「お氣づきにならなかつたんですか?」

「そりやあ……私の皿には愛しいセオ様しか映つていませんから」

エルナに対して少女はポツと顔を赤くして答える。

……俺が男のままだつたら、この状況には多少は喜んでたかもし

れない。

多少は……。

「ん？ エルナもいるってことはセオ様は異世界から来た例の？」

「はい」

「わざわざ異世界からお越しいただき、その上この国のために戦つてくださるなんてありがとうござります！ ああ、やっぱりセラ様は素敵な方です」

「…………」

「ど、どりあえず戻りましょうか」

どりあえず城に戻ると、再び王室にいた。

「この子は、セフィーナ。もう知つてると困つけど私の娘よ」

「…………うん」

改めて紹介してもらつた。

この親子が変人なのは間違いなさそうだな。

「改めてよろしくお願ひします、セオ様」

ペコリと頭を下げるセフィーナ。

何かちょっと今日は……疲れた。

「休憩したいから部屋に戻つていい？」

「いいわよ。お休みなさい」

王室を出ると無駄に長い廊下を歩いた。いや、ホントに長すぎだ
る。

人が疲れてるつてのに、この長さはケンカ売つてんのか?
短くなーれ。うん、無理なのは分かつてるよ? 分かつてるけど
……思つちゃうんだ。

それにも……まだ慣れないなあ。
いきなり女になるなんて……。

これつてさ、恋愛とかする場合に立場逆転になっちゃうだり……。
今まで付き合つたこととかはないから、まだマシなんだろうナビ
……。

ため息を吐いて、トボトボ歩く。

ふと前方に人影が見えた。

誰かいるな? これつて、挨拶とかしなきゃいけないのか?
相手の姿がはつきりと見える所まで来た時、思わず目を奪われた。
いや、すごく美人だつたとか美形だつたとかそういうわけじゃな
く……。

田の前の人物は亞麻色の髪に、騎士用の服の青年……。
姿も性別も変わっていたけど、原型は留めていて
こちらに気づいたその青年は、笑顔を浮かべる。

「はじめまして」

「…………」

「?」

その姿を見て、脳裏に浮かんだ名は

桜下リナ。

田の前の青年は、どう見ても転生した桜下リナにしか見えなかつた。

もひ、まさに桜下リナが男になつたらこんな感じだひくなつてやつ……。

セラグリムもエルナも言つてたけど、この世界に転生したのは俺だけじゃない。

それを考へると、桜下リナもこの世界に転生してたつておかしくはない。

でも「イツは今、はじめましてって言つた。

俺と桜下リナは何も無関係つてわけじゃない。確かに桜下リナは多くの男に告白されてたからその一人にすぎない俺のことが特別心に残つてゐるとは思えないけど、俺が告白したのは、転生する直前だ。

全く覚えてないなんてことは、ないと想つ。

もしかして、姿が変わつてるから分からないとか？

一応、原型は留めてるからそんなに分からないうつてことはないけど……やっぱり性別も変わつてる分他の人から見れば分かりにくいのかな？

とか思いながら、振られたこともあつて自分の正体を明かすのも気まずいと思つた。

「あ、僕はラゼルと言います」

長い沈黙に耐えかねたのか、自己紹介をしてきた。

俺もいつまでも沈黙しているのは悪いので、これからも自己紹介をする。

「俺はセオ」

「俺……？」

不思議そうにこっちを見てくる。

まあ、そうだよな。

流石に俺なんて言う女はなかなかいないだろうし……。
前は男だったから、とか言えるはずもないけど。

「あ、セオさん！」

「ん？」

振り向くと、廊下を駆けてくるエルナの姿があった。

うん、そんなに走つたら胸が揺れるからね？ 痛いよ？ 多分痛いよな？

まあ……俺は揺れる心配ないから別に関係ないんだけど……。
……どうせ女になるなら、貧乳じゃなくて巨乳でも良かったんじやないか？

胸を押さえながらエルナが立ち止まる。

畜生……胸のボリュームが増えすぎて太つても知らないぞ……。

「その方もセオ様と同じ世界からお越しになられたんですね」「

「やつぱりか……」

「ちなみに……大抵の人には、あちらの世界の記憶はないんですよ

「え？」

「ほら、通常なら前世の記憶というのはないものです。セオ様みたいなケースは稀なんです」

なるほど……。記憶がないのか。

それなら、はじめてだよな……。

もはや田の前の桜下リナ いや、ラゼルは爽やかな笑顔を浮か

べたままだ。

……完全にモテるだらうな。結局、生まれ変わっても性別が変わつても本質は変わらない。

つまり、俺が言いたいのは……モテる奴は性別が変わってもモテるんだろうなってこと。

うん、俺は……俺は……いいんだ。女になつても可愛くないし……。

それにしても……桜下リナは同姓愛者だつたけど、もしかして男に生まれたかったのかなとか考えてみたり。

「あ、ラゼルさん。」ちらりとセオさんです

「そりなんですか。話は聞いてます。よろしくお願ひします」

どういう話を聞いてたんだ?

まあ、そんなに気にする必要はないか。

「よろしく」

それにしても……記憶がないのか。

いや、記憶があつてもいいことはないと想つし、これはこれでいいんだけどさ。

それと俺の「コイツに対する気持ちは……無関心でいいのかな? いいよな? うん、俺が好きだつたのは桜下リナであつて……。いや、その美少女じゃないからダメとかそう言つわけじゃないんだからな? 桜下リナの中身も当然好きだつたわけ……優しくてちょっと天然なところとか……。

「あの、具合でも悪いんですか?」

ラゼルが心配そうな表情で尋ねてくる。

しまつた……。

また沈黙してた。

「悪くないよ。ちょっと考え方としてただけだから」「そりなんですか？」

「そ、そりだよ」

「そりが、普通は記憶なんか残つてないのか。
何だか寂しいような……。」

しかし男になつちやつたのかあ……。

うう……残念だなあ。

確実に俺のなかでは世界最高の美少女だつたつて言つのに……。
いや、男になつても一応美形だけさ？　いや、女のままでも困
つてたけど。

俺も女だしさ。百合百合とはいかないけど……。

「あ、そりだ。折角同じ世界から来たんですから、お話してみると
いいですよ？」

何でそりなるんだ？

目の前にいる桜下リナ……あ、間違えた。ラゼルを見据える。

「じやあ……ソリで立ち話も何ですかから部屋で話しますか？」

相変わらず笑顔。

うん、普通の女の子ならこれだけでも落ちるかもしれない。

生憎俺は普通の女の子じゃないからな。

こんなもので落ちない。うん、相手が前世の想い人だろつと簡単
には落ちない。

落ちないからな。

無駄に広い子供が遊びまわるそつなほびスペースに空きがある部屋に入ると思わず立ち止まつた。

話つて何を話せばいいんだ？

記憶があつたら、向こうの世界の思に出とか話せたかもしれないけど相手は記憶がない。

この状況で向こうの世界の話を持ち出すのはNGだらう。

それ何の話？ つてなりかねない。

じゃあ、魔法の話でも つてまだこの世界に来たばかりでほとんど知らなかつた。

何を話そつか考えながら部屋のなかをうろついてたら向こうから声をかけてきた。

「一つ……言いたい」とがあるんですが……」

「言いたいこと？」

「話じやなくて言いたいこと？

もし、なぜあなたは貧乳なんですかとか聞いてきたらブチのめすぞ。

元桜下リナだからフルボッコは勘弁してやるけど。ラゼルは、どうこうわけか俺の手を握ると真剣な表情で見つめてくる。

「好きです」

「黙れよー？」

ホントに向なんだろ？

この世界に来て、女になつて……王女様にモテてコイツにもモテ

て……。

俺可愛くないよ?

すゞい美少女になつてゐなら、この状況も頷けるけどね……。
そうでもないし……。泣いてなによ?

「では、とりあえず……」

話の切り替えが早くて助かるよ。

「僕があなたをお守りします。これでよろしいですか?」「黙れって言つたのが聞こえなかつたのかよ?」「すみません。耳が遠くて」「それ」「……多分俺、強いしさ……」

自信過剰とか調子に乗つてるとかじやなく本氣で。この世界じやそれなりに強いみたいだ。

なら、わざわざ守つてもらひう必要もないだろつ。

「では、悪漢から」「ホントにもう黙れよ」

俺に興味を示す悪漢がいたらある意味奇跡だ。何かもう考えるだけで疲れる。

立つてゐるのも疲れるし、ベッドに腰掛ける。

ふわふわのベッドは、気持ち良くて疲れを取り去つてくれる気がする。

もう寝たいな。一生この心地いい布団から出たくない。

無理なんだけども。

ベッドでボーッとしているトライゼルが戸惑いがちに声をかけてくる。

「あの……お誘いは嬉しいんですが、僕はまだ未経験で……そ、それにもまだ早いかもせんし……あ、でもお望みなら何とか……」
「何勘違いしてんだよ！？ ベッドに座つただけだからなー…？」

いや、もう本当にコイツ元桜下リナなのか？

まあ、俺は桜下リナの全てを知っていたわけではないけど……。
勘違いは激しいみたいだけど、突然襲いかかってくる猛獸みたいな性格ではなさそうだし、それなりにいい奴なのかな？
一応は前世の性格を受け継いで優しいところがあつて紳士的だと信じじよつ。

太陽の眩しい光で目を覚ました。

朝の日差しは思ったよりも強烈でじわりと田の端に涙が滲む。ベッドから出ると窓から外を覗いてみる。

青と白のグラデーションが広がっている。まさに夜明けの色彩。きれいだなと思いつつ眺めていたら背後から衝撃を感じた。いや、殴られたとかそういうものじゃなく抱きついてきた衝撃だ。

何だろうな……。振り向きたくないよ……。

何で抱きついてくるんだよ。抱きつく必要性はないと思つんだ。それともこの世界じゃ抱きつかれるのは日常の一部なのか？ いや、そんなはずはない。

今、自分に抱きついてる奴以外は抱きついて来なかつたし。やがて、明るく可愛らしい声が響く。

「おはようございます、セオ様！ ああ、今日も凜々しいです。あなたのがくもりを感じられて私はとても幸せです」

「コイツは自分の行動と言動を恥ずかしいこと思わないのかよ？ どういう教育受けてきたのかちよつと知りたくなつた。それを素直に聞けば、コイツがせらに興奮するのは間違いないからやめておく。

今なおぎゅっと力を込めて抱きついてきているセフィーナを引き離すと振り向いて声をかける。

「こちなり抱きつくなよ」

王女なら貴族の男とか選び放題だらう……。
何を好き好んでこっちに来るんだよ。

まさか、女にしか興味ないとか？　いや、あの時俺が助けたからか？

ホントに王女なのか疑うほどだ。

でも、あのセラグリムが国王つてぐらいだから、案外何も不自然じゃないのかもしねえ。

父親の顔も見てみたいよ。

いや、ご挨拶に伺うわけではなく……。

「セオ様、行きましょ」

言いながらセフィーナは俺の手を引き、歩き出す。
どこに行くんだよ？

とりあえず、手を振り払つ。

「手なんか引かれなくとも歩けるからな」
「セオ様……」

肩を落としてシュンとした表情になる。
うん、普通の男なら落ちるだろうな。いきなり襲いかかる奴もいるかもしねえ。

けど俺は、女だ。一応……。

「行きましょ」

にこりと笑うセフィーナの笑顔は愛らしい。

そう、外見は可愛いんだよ。

でもさ、俺も女だから。

セフィーナに続き、長い廊下を歩く。

靴の音が無駄に長い廊下に響き渡る……。

「あ

ぱつたりとラゼルを出くわした。
ラゼルは朗らかな笑みを浮かべる。

「おはよひげやこます、セオ」

「ああ、おはよひめ……」

「……」

セフィーナが険しい表情で沈黙していた。

初めて見る表情だ。いつも嬉しそうな顔しか見たことないんだけ
ど、何かあつたのか？

「ああ、セフィーナ王女もいたんですね？」

何か含みがありそうなラゼルの言葉。

……いたんですねってよく考えるとちよつと失礼じゃないか？
その言葉を聞いたセフィーナが顔を引きつらせる。拳を固く握り
しめて震わせてる。

怒ってるのか？ 確かにいたんですねとか言われたら腹立つかも
だけど……。

「いたんですねって何よ？ これだから男は……」

「何か言いたいことでもあるんですか？」

「言いたいこと？ あるわよ。セオ様に慣れ慣れしくするんじやな
いわよ」

えーと……セフィーナさん？ 敬語じゃなくなつてしまふよ？
素が出ちやつたつてところか？

「なぜですか？そんなルールはないじゃないですか」「セオ様は私のことを愛してるんだからー。」

いや、愛していないよ？

「それはないでしょ？なぜなら、昨日……僕はセオさんからお誘いを受けましたし」

何も誘つてねえよ。

「セオ様は私と結婚するって言つたんだからー。」

だから言つてないって。

俺の言葉を都合良く脳内変換しそぎだね。

思い込みも大概にしろ。

「いいえ、セオさんは私の妻になると約束してくれました。女性同士では子作りもできないでしょ？」

約束なんか存在しない。

てか、軽々しく子作りとかいう単語を持ち出すな。

元桜下リナがそんな発言するのはやめてくれ。前世の桜下リナを汚すんじゃない。

ホントにもう「マイソラ黙れよ。

この状況、私のために争わないで！ とか言えるんだらつけど言つてたまるか。

この組み合せを見ろよ。

勝手に人の言つたこと都合良く変換して自信過剰に愛を語つてるような奴らだぞ？

あと、片方が自分と同じ性別つて何だよ。もうやだよ。

今も言い合いが続いている……。
流石に耐え切れなかつた。

「いい加減にしろおつー！」

「うう……すみませんでしたセオ様……だから……許してください……
僕も申し訳ありませんでした。だから許してください……」

ショーンボリ肩を落としてこいつの様子を伺つてぐる一人。

「もういいよ……」

「ホントですか！ ありがとうございます！」

「良かつたです」

反省してゐるのか？

いや、この様子を見る限り反省してなさそつだけど……。

「フフ……早速みんな仲が良さうで私も嬉しいわ」

セラグリムは、玉座に腰掛け、それはもう美しい笑みを浮かべていた。

王室つて、国王が座る椅子しかないんだな。
客の分も用意しとけよな。

何様だよ……。あ、王様か。畜生……。

行儀がいいとは言えないけど、床に座ることにした。
いや、おかしいのは分かつてゐけど。ずっと立つてると疲れるし
。

「それで……今日ね、一度戦場に出でもらいたいのよ。随分苦戦しててねー。救世主様にぱぱっと片付けてもらいたいわけよ」

「……戦うのか……」

「大丈夫よ。あなた達なら軽く一軍ぐらいは吹っ飛ばせるわ」

……あっちの世界から来た人間つて相当強いんだな。

一軍つて、もはや最強じゃないか?

「まあ、安心しなさい。貴方達に言つてもうつとは、向こうも少
数だから」

「そうなのか……」

「大丈夫ですよ、セオ様。私がついてます!」

……セフィーナは強いのか?

その割には、ここの前魔物に囲まれてたけど……。

そして俺達が来たのは、荒れた大地が広がる荒野だつた。
どういうわけか、空も暗く不気味な雰囲気を出している……。
枯れ果てた木々が目に入る。

その中央に、武装した兵士達の集まりのよつなものが見える。
剣や槍を持ち、鎧なんかを身に纏つた明らかに戦いに来ていると
いった容貌……。

木陰からそれを覗きつつ、セフィーナに尋ねる。

「あいつらか？」

「はい、そうです。まだ気づかれてないようですし、不意打ちで楽にやつちやいましょう」

「樂に付てなあ……」

「その方がいいんですね」

「確かに勝率は格段に上がりますね」

ラゼルも頷く。

卑怯も何も戦争には関係ないか。

まあ、そうだよな。

やらなきや、やられる……。

手に炎豪刀を持ち、今だこじらに気づいてない兵士達の群れに強襲をかけた。

背後から斬りかかり、一人倒す。

横からくる兵士の斬撃をかわし、また斬る……。

その戦いは、魔法を使う必要もないほどあっさりと終わってしまった。

……確かに、強いんだな……。

「終わりましたね」

全て倒し終えて、武器を消し去る。

「怪我人がいるよつですか、手分けして探しよつ」

ラゼルの言葉に頷く。

今回来たのは、戦つ」とよりも味方の兵士達を救出するのが目的だった。

どこかに転がってるだろつじ、怪我をしてるなら早く見つけて治療した方がいい。

「じゃあ……俺は、あつちを探すよ」

「セオ様、気をつけてくださいね。まだ敵が残っている可能性もありますし」

「あ、ああ……」

それにしても、あつさりすぎるな。

いくら強くても、こうも簡単に終わるもんなのか?

何か 何がある気がする。

そんな考えが浮かんでくるけど、それを振り払って足を進めた。

枯れ木ばかりの森のなかまで来たけど、兵士は見つからずため息をついた。

ホント、どこにいるんだうつな。

早く見つけないとなのに……。

じめじめした空気が漂っていて気分が悪い。

俺、こいつ空気ダメなんだよな……。

ふと、背後から足音が聞こえた。

振り向くとそこには、兵士一人ともう一人

悪趣味なピロロの

仮面をつけた魔道師らしき人物。

「貴様、よくも仲間を……」

兵士の方がこちらを睨みつけて剣を構えるが、仮面の奴はそれを制止する。

あれで前見えてるのか?

ソイツは仮面を外す。つけてる意味あったのか? 魔力の制御とかそんなのか?

雪のように白銀の髪……片目を白い包帯で覆つた……歳は十代後

半程度に見える青年だった。

「ダメだよ、君は帰った方がいいよ」

「しかし……」

「強い者には強い者でしか対抗できない」

「はつ……」

兵士は敬礼すると姿を消した。

……兵士が姿を消して一人なった途端、ぞくりと寒気がした。

他の奴とは違う。

これは恐怖だ。

「ヨイツの戦う姿を見たこともないはずなのに……強いと分かってしまう。

俺は、この世界では結構強い……でも、何か逃げなことまずい、
といつ気持ちがこみ上げてくる。

「じゃあ、始めよつか？ 異界の騎士さん？」

俺は、ウイングウから炎豪刀を呼び出した。
相手の武器は刀身が真っ白な剣

炎豪刀を構えたまま、さつと手をかざす。

ウインドウが現れ、項目の『魔法』をタッチする。

使える魔法の一覧が表示される。そこに表示されている魔法の一覧は大抵が剣に纏わせて攻撃に属性を持たせたり威力を上げたりするものだ。

剣を使って戦うのなら、普通の魔法よりもこの手のタイプの方がいいらしい。

『炎竜』をタッチする。

炎豪刀が炎の竜を身に纏う。

その炎の竜はうねり、本当に生きてるみたいだった。

俺は、疾走 勢い良く飛び上がり炎豪刀を振り下ろす が、

意外にもあつさりかわされ、奴が剣の柄で思い切り腹をついてきた。そのまま吹っ飛び、地面にごろごろ転がった。

ズキズキと痛む腹を押さえてうずくまる。

すごく痛い……。

普通の腹痛とは比べ物にならない。

刀身じゃなくて、柄だったのが唯一の救いだ。

てかアイツ何なんだよ！？ 魔道師だろ、あの格好……。

なのに力は強い上、剣で戦うって何なんだよ。杖でいいじゃないか……。

「もう終わり？」

足音が近づいてくる。

来るなよ……。

まずい……このままじゃ殺られる。

今だに痛む腹を押さえつつ立ち上がり、奴を睨みつける。

睨みつけたと同じ効果はないんだろうけどさ。

「終わりなわけないだろ……」

炎豪刀を構えなおし、体勢を整える。

「そつか。良かつた」

何で良かつたなんだ？

あっさり倒せたら面白くないとか考えてるのか？

何でいきなりこんなクソ強いのと戦わなきやなんないんだよ。運悪いのかな……？

剣を振るうとその衝撃波に乗つて炎の竜が奴に襲いかかる。竜の長い身体が奴を囲み、強い炎を発してハツ裂きにすると思っていたけど……奴は、剣で竜を切り払い、消し去つた。

「…………」

ホントに何なんだよアイツ！

反則だろ！？ 多少は効いてもいいじゃないか。

何だよ？ 勝てない設定にでもなつてるとか？ 恒例の負けイベントか！？

ふざけんな。

この世界に来ていきなり負けるとか気分悪いんだよ。

でも……攻撃は効かないみたいだ。

そう考えるうちに今度は向こうから攻撃をしかけてくる。剣で斬りかかってくる。

それを炎豪刀で受ける。激しくぶつかり合つ金属音が響き、火花を散らす。

魔術師のくせに力が強い……この状態が続けば力負けしそうだ。

力を振り絞つて奴の剣を振り払うと後退して距離を置く。ゆっくりと息を吐いた。

逃げた方がいいんだけど……追いつかれるだろうな。てか、魔術師……だよな？

何でんなに力強いんだよ？

まだ魔法使つてないし……。単に魔術師っぽい格好の剣士か？

「僕に魔法使つてほしい？」

「え……？」

何か、心読まれた？

「コイツ、本当に魔術師なのか……。」

「う言つてるつてことは、魔法がくるのか？

どんな奴だ。」

周囲を警戒する。

魔法はただの攻撃と違つてどこからくるか分からない。

奴を見る限り、何もしてないようには見えないけど、魔法を既に発動させている可能性がある。

「……っ！？」

身体が動かない。

どつと冷や汗が噴出す。

目に見える魔法なら避けるなりできたかもしね。」

けど、これは……防ぎようがない。あと、これはまずい。

このままだと、どんな攻撃がきたとしても避けることができない。

「さひと

奴は俺の目の前で立ち止まると、剣を振り上げる。

これは……。

そのまま振り下ろされ、身体に冷たい感触 難い激しい痛み。

地面に倒れこみ、血が噴出す身体を押さええる。

「あああっ……！ うぐ……」

今まで味わったことのない痛み……。

俺が今まで負った怪我なんて、転んで膝を擦りむいたとかそんな軽いものばかりだったからとても耐えられない。

「うう……？」

さらに足で踏みつけられる。

このままじや死ぬ……。

コイツ、女相手にこれはないだり……。

普通、女には攻撃自体しないんじやないか……？
奴は足をのけると隣にしゃがみ込んで再び剣を構える。

間違いない。

トドメを刺すつもりだ。

「残念だなあ……。ちょっと期待してたんだけど」

これから殺す相手に笑顔で話しかける「コイツの神経はビビつくなつてるんだ？」

痛いなあ……。

死んだら、この痛みもなくなるかな。

終わつた。

もう終わりだ。

……。

……。

……いや、まだだ。

俺はまだ生きてる。

死んでない。

動こうと思えば動けない」ともない。
なら、まだ終わつてない。

隣に転がつている炎豪刀をかろうじで掴み、一瞬で奴の首を貫く。
首に突き刺さつた炎豪刀を引き抜くと、奴の首からは真っ赤な血
が噴出す。

その顔は驚きの表情だった。

これで死んだ と思った。

「これは予想外」

死んでない。

どういうことだ？

俺の動搖した様子に気づいたらしく、丁寧に説明してくれる。

「僕は魔人だからね。魔人は、治癒能力が極端に高いんだ。そうだ
ね……僕を殺したいなら首を切り落とすぐらいはしないと」

「なつ……」

「ほら」

奴は俺の手を掴むと自分の首に持つていく。

触つてみると血まみれになつてゐるけど、傷口がない。

……まづい。

今度こそ、殺られる。

「それにしても……思つたよりやれるみたいだね。気に入ったよ

言いながら、俺の身体に手をがざすと淡い光が身体を包み込んだ。気付けば痛みも消えていた。

「は……？」

あれ？ 治してくれたのか？
何でだ？
理解できない。

「ここで殺すのは勿体ないな。 そうだね、 また君がもう少し強くなつたら相手してもらおうかな」

「コイツあれか？」

「何て言うか知らないけど、あれだ。」

とにかく強い相手と戦うのが好きなんだな。
ああ、でもこれで命拾いができたかもしれない。

「君、名前は？」

「今更聞くのかよ……。 セオだよ」

「へえ……。 僕はミクランル」

「ミラクル？」

「ミクラルね」

間違えやすい名前だな。

「略してミクでもいいよ」「いや、そんな略して呼ぶほど仲良くなないじ

敵同士だしな。

そんな呼び方して愛着湧いたら厄介だ。

「……あと、一つ言つていいか？」

「いいよ」

「女にはもう少し手加減とかそういうものを……」

「難しいかな。加減の仕方つてものを知らないからね」

「……」

「セオさん！」

「あ」

声が聞こえた方へ視線を移すとラゼルが立っていた。

「じゃあ、僕はこの辺で。またね、セオ」

言い残し、ミクラルは姿を消した。

テレポートとかかな？

ラゼルが心配そうに尋ねてくる。

「大丈夫でしたか？ 何もされませんでしたか？」

「いや……殴られたり斬られたりしたけど……」

「殴られたり斬られたりですか！？ 傷を見せてください」

「傷なら治してもらつたから大丈夫だつて」

「……？」

不思議そうに首を傾げるラゼル。

まあ、そうだよな。

殴られたり斬られたりした上治してもらつたとか……。

「えーと……傷は？」

「こら、服を捲るな。一応俺は

「

「……すみません」

あ、言つ前に分かつたみたいだ。

「じゃあ、とりあえず怪我人も見つかりましたし帰りましょうか」

「そうだな……」

「歩けますか?」

「歩けないから抱つ」……」

「分かりました」

ちょっと笑わせるために冗談のつもりで言つたのに真剣に受け取つたらしい。

ホントに抱つこしなくていいよ!?

「ば、バカ! 冗談だつて。歩ける! 歩けるから!」

「そうなんですか? あ、あと」

「ん?」

ラゼルは自分の上着を脱ぐとなぜか俺に差し出す。

「何だよ?」

「その……」れ着てください。田のやつ場に困ります

「……うあ……」

自分の姿を見つめなおすとこれはひどい。

斬られて血まみれになつてたからすつかり忘れてたけど、服^いと
きられて大変なことに。

慌てて上着を受け取つて着込んだ。

男のままだつたら問題なかつたんだけど……。

「婿に行けない……」
「嫁、ではないんですか？」
「……」

城に戻ると救出した兵士達を医務室に送り届け、自室に戻った。ベッドに腰掛け、窓に目を向ける。

赤みを帯びた空が広がり、山の向こうに沈みかけた太陽が見える。特に何も考えずにその風景を眺めていると部屋にノック音が響いた。

俺の返事を待たずして扉が開き、姿を現したのはエルナだった。エルナは、可愛らしい笑顔でぺこりと頭を下げる。そして何も言わず俺の隣に腰掛ける。

「今日はお疲れ様です」

「あ、うん。あのさ、やつぱりあつちの世界から来たって言つても何にでも勝てるわけじゃないんだな」

「ええ。あちらの国でも、異界の人間に対抗できるほどの実力を持つ者はいます。普通の兵士なら問題ないでしょうが。魔道師です。あの国で一番力を持つているのは魔道師。何せ魔法の国ですからね」

「魔道師か」

そう言えば、ミクラルも魔道師っぽかつたな。

服装なんか見る限りそんな感じだつたし、一応魔法も使ってた。魔法は一回しか使ってないけど、そんなに魔法を使つまでもなかつたつてことか。

今まで十分じゃないことが良く分かった。

アイツみたいなのが他にも「ゴロゴロ」いるのか？ だとしたらまずいな。

勝てる気が……。

「そう言えばや……」

「何でしょ、う？」

「ラゼルは、自分は転生したことは知ってるのか？」

記憶がないんだつたら、知らない可能性もある。別にそれがどういってわけじゃないんだけど、気になるじゃないか。

エルナは相変わらず笑顔を崩さない。

「知つてますよ。転生したといつことは知つているんです。でも、記憶がないんです」

「なるほ……」

記憶はないけど、転生したつてことは云えられてるのか。まあ、記憶がないなら田が覚めても自分が誰かもそこがどこなかも分からなし、そうやって何でここにいるのか教えてもらつた方がまだいいのかな。

何も分からぬいよりは……。

そう言えば、あつちの世界で最後に聞いたあの声は、誰の声だつたんだ？

何度も謝つていたあの声は、セラグリムのものでもエルナのものでもセフィーナのものでもない気がする。

「そう言えば、俺を転生させたのつて誰なんだ？」

「ええと……」

聞いた途端、エルナは困つたような表情でもじもじ。しばりごじめかみに手を当てて唸つていた。

「うーん……私の記憶が正しければ聞いてないです……。誰が行つたのかは不明なんです。セラグリム様なら知らないことはないでし

ようし、今度尋ねてみては如何でしょつか？」

「そうだな」

流石にセラグリムが知らないことはないだろ。
国王だし、ご丁寧に呼び出した理由なんかも教えてくれたし。
また聞いてみるか。

中庭に出ると、色とりどりの花が咲き乱れる花壇が目に入った。
やつぱり王宮の中庭は豪華だな。
うん、俺も頑張つて有名になつて大金手に入れたらこれより立派な豪邸を建てるんだ。

この世界は魔法があるし、すぐに完成したりするのか？
そうだつたらいいな。俺、長い間待てないしや。
ホントに待つのが苦手なんだよ。

向こうの世界でもカップメンは十秒しか待てなかつた。だつて三分も待つとか無理だろ？

早く食べたいし。麺はちょっと固いままだけじ喰えないことはないしさ。

まあ、今となつてはカップメンを食べる事もないから関係ないんだけど。

でもちょっと恋しいなあ。

ここは一応外だつてのにテーブルまである。

あれだよな？

中庭で紅茶飲んだりするんだよな？

俺は紅茶飲めないけど、ここでおこぎりとか食べたら良さそうだ。

ああ、でも桜下リナ……。勿体ないなあ。

みんな美少女、一度と現れないと思つてる。

男になつちやつたのか。

文句を言つつもりはないけど。

「あの、セオさん？」

「え？」

慌てて振り向くとラザルがいた。

「さつきから呼んでいたんですけど、どうかしたんですか？」

「あ、ああ、そうなんだ。考え方だよ」

「そつなんですか？」

「そつだつて」

それにして、桜下リナは単に同性愛者だったわけじゃなくて男に生まれたかったとか？

同性なら誰でもいいわけじゃなく、好きな相手が同性だっただけでとか。

もしその相手が男でも好きだったかもだし。

「で、何か用か？」

「べつに用はないんですけど

通りかかったから声をかけたとかそんな感じか。

まあ、知り合い見かけたら基本的には声をかけるよな。

「セオさんほ、向ひの世界での記憶があるんですね？」

「あ、ああ

思わずつぶしたえる。

まさか「トイツが向ひの世界について話題を振つてくれるとは思わ

なかつた。

記憶はないのに、どうこうア見だ？

「記憶があるとこうのは、家族や仲の良かつた人のことも覚えてるんですね。その……いきなりそういう人達と別れるのはどういうものなんでしょうか？ 僕には記憶がないので、何も分からんいんです」

「それか……」

もちろん俺にも家族はいた。

父と母と兄の、四人家族だった。

冷え切つた家庭というわけもなく、よく話をしたりして仲も良かつたし結構いい家庭だったとは思つ。

また会いたいとも思うし、寂しいとも思つ。

考えるとホントにもうあれだから、考えないようにしてたんだけどな。

「うん、やっぱり寂しいかな。こんなに早く別れるとも思つてなかつたし。あとさ、旅行に行く予定とかあつたんだよな。家族旅行。怒つてるだらうなあ、行けなくて……」

……まよい。

話せば話すほど、目の端に何か浮かんでくる。

ダメだ、ここでは。

「す、すみません。僕、何も考えずに聞いてしまって……」

ラゼルが焦つてペペの頭を下げている。

違う。

これは違うんだ！

「お、俺は泣いてなんかつ……」

いや、もう泣いてるんだけど。
隠し切れない。

目から何か零れてる。

不意に身体が温かくなつた。
え？ 何だ？

気付けば、抱きしめられてた。

俺は子供じやないんだぞ！？
してないんだ。

断じて違う。

「すみません。僕、何も考えてませんでした」

「な、何してるんだよ？ 放せよ」

「でも、僕は、あなたが羨ましいです。大好きだった人のことが
記憶に残っているのが……。僕は、自分を生んでくれた人がどんな
人なのかさえ分かりませんから……一度と会えないとしても、そつ
いう人達のことを覚えていられるあなたが羨ましいです」

確かにそうかもしねりない。

何も覚えてないなら、樂つてわけでもないんだな。

俺は桜下リナの両親のことも知らなかつたし、コイツに何も教え
てやれない。

あと、俺はこの状態で眠つてしまつという大失態をおかした。

背中にふわふわした感触を感じる。

その温かさはとても心地よくてずっとこのままでいたいと思わせられる。

田を閉じたまま思考を巡らせる。

確かに、急に泣き出してラゼルに抱きしめられて……俺はガキじゃないのに抱きしめる必要なかつただろ。

そのまま眠っちゃつたんだっけ？

大失態だ。あのまま寝るとか。

まあ、相手が元桜下リナなだけマシって考え方よ。

田を開けると心配そうな表情で覗き込んでいるラゼルの顔が映つた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ」

上体を起こすと軽く息を吐いた。

そしてベッドから出る。

さて、これから何をするか。

窓に視線を移すと空は漆黒の闇に覆われ、ダイヤモンドの如く輝きを放つ星々が散りばめられていた。部屋の空気も冷たくなつていて、少し身震いをしてしまうほどだ。

「あ、セオさん」

「何だよ？」

「国王様が夕食を一緒にしませんかと言つてましたよ。お腹は減つてますよね？」

「あ、ああ……」

そう言へば、ずっと寝てたから晩ご飯はまだだしな。
考へると空腹感が襲つてくる。

「あ、エルナさんが田を覚ましたいこれ渡せと」

そう言つながら、きこちなくラゼルが差し出したのは衣服だった。
上に下着は乗つかつてゐる。

もう少し考へて欲しかつたよ、エルナ……。

これを男に預けておくつてあんまり良くはないと思つんだ。
これつてさ、これから履く下着を公開してゐるのと同じだら?

「あ、ああ、ありがと」

とりあえず笑顔で受け取る。

冷や汗をダラダラ流しながら。

「じゃあ、着替えるから」

「僕は後ろを向いてますね」

「いや、部屋を出るよー?」

何かのトラブルで振り向いたらビックリしちゃうだ。

「すみません。では、出ます」

苦笑いを浮かべながらラゼルは部屋を後にする。
もう何なんだろつた。

着替えを終えて廊下に出ると窓から外の様子を覗いていたラゼルがこちらに振り向き、笑顔を浮かべる。

常に笑顔を作れるとか羨ましいな。

俺はそんなにうまく笑えないしな。特に意図的にやるひつとすると。にやり……。

すぐさま顔を手で覆つとうずくまる。

分かつてたよ。こんなもんだって。

でもさ、もう少し愛想いい奴になりたかったんだよ。ラゼルが戸惑いがちに声をかけてくる。

「あの、セオさん?」

「ななな何だよ!」

やばい。今の笑顔はあまりにもひどかったか。

急いで立ち上ると話をすりかえるべく話題を探した。そして。

「俺も……」

「はい?」

「巨乳でも良かつたと思つんだよ」

俺は何てバカなんだろう。

何でこんなあり得ないことを口走つてしまつたんだ。

いや、少しぐらい胸大きくてもいいかなつて思つてはいるんだけど。

ビ。

女ならやつぱり大きい方がいいよな。

いや、そこは今重要じやない。

恐る恐るラゼルの様子を伺う。

ラゼルは、顔を赤くしてじらりを見た。

「あの、何ですか？ その返答にすゞしへ困るセリフは……」

「聞くなよ。ちょっとしたミスだよー。」

自分で言つておきながら、実際何をどうしたらこんなミスが生まれるんだか。

こんなにも自分のことを恥ずかしこと思つたのは初めてだ。

「小さいままでも大丈夫だと思いますよ。」

「いや、触れるな。その話に」

まあ、言つて出したのは俺なんだけどさ。ミスとは言つても。

「多分、あなたには小さい方が似合つてると思っています」

「それは、貶してるのか？」

「いえ、そういうわけじゃなく。今までも十分可愛いと思います」

「だ、誰が！ 僕は、喋り方も男みたいだし、女っぽくないし……」

元は男だったから、女みたいな喋り方してもキモいんだけどな。いや、案外周りから見ればそれでもないかもしねないけど、自分がダメなんだよ。

前世のお前の方が可愛かったよとは言えるはずもなく。

「セオ様！ お久しぶりですー。」

ぱたぱたうるさい足音が聞こえたかと思つと、背後からとんでもない衝撃。

何とか倒れないように持ち応え、振り向くと嬉しそうなセフィーナがくつつき虫みたいにくつついてきていた。

「久しぶりでもないだろ。てか離れろ」

「そ、そんな、セオ様は私のこと愛してないんですか？」

田の端に涙を浮かべながら、懇願するような表情で見上げてくる。普通の男なら落ちるな、これは。俺には効果がないので、くつつき虫っぽいセフィーナを引き剥がす。

「愛してはないからな！？ 別の感情ならない」ともないけど」「何ですか？」

「友情？」

「そんな友達で終わりたくないんですね！ はつ、もしやそここの男が！？」

セフィーナがラゼルに視線を移し、敵を睨むような表情に早代わり。

なぜか手をかざしてウイングウを呼び出すと杖を出現させる。その杖を握り、先端をラゼルに向か言葉を吐き出す。

「あの男があなたを惑わしているんですね！ しかし安心してください！ あんな男、さつさと消し去つてあなたが気兼ねなく私を愛せるよ！」

「落ち着けよ」

「ほ」んと頭を叩いてやるとセフィーナは「あやう」とか軽い悲鳴を上げて渋々杖を消しおつた。

「セオ様、私は」

「あ、セフイーナさん！」

セフィーナの名前を呼びながらぱたぱた走つてきたのはユルナだつた。

はつとしたセフィーナはなぜか俺の後ろに隠れる。

「セフイーナさん、お勉強の時間ですよ？」「セフイーナはいません」家庭教師さんが

俺の後ろで身を屈めながらボソッと呟く声が聞こえる。
いやいや、いるのバレバレだから。
隠れられるわけないだろ。

「ほら、早く行きますよ。お待たせしてはいけません」

エルナがセフィーナの襟首をむんずと掴み、ズルズル引きずつて行く。

意外とエルナは力強いんだな。
じたじた暴れながら叫ぶセフィーナ。

「いやあああああ！ 勉強は嫌です————！ セオさまあ

ああああああー！」

助けてやる義理はない。

てか連れて行つてもらえた方が助かるしな。

勉強って言うと、やつぱり王女だからいろいろ必要なんだよな。王族に生まれたら楽とかそういうわけでもないことが分かった。

セラグリムが待つてゐるらしい食事をするためのルームに足を踏み入れると、中央に白い布がかけられたテーブルがあり、見ているだけで目が眩しくなつてしまいそうなほど豪華な料理の数々が並べられていた。

大きな何かの肉を丸焼きにしたのとか、ふわふわしたパンとか、きれいな色で甘そうなデザートとか。見たこともないような星の形の果物。

魔物の肉とか混じつてないよな？

それを考えると恐ろしいのであんまり考えないことにした。

椅子に腰掛けたセラグリムが、微笑む。

「こんばんは、セオ。ほり、じつぞ座つて？ どれでも好きなものを食べなさい」

座るよつて促され、椅子に腰掛けた。

「ほり、どれ食べるの？」
「えーと」

こんなにあつたら、流石に迷つ。
眩しい料理に目をうろいろさせて。

海苔が巻かれたシンプルなおにぎりに目を留めた。

「お、俺はそれでいい。それがいい」「え？ それでいいの？」

セラグリムが目を丸くしていた。

結局俺は、セラグリムと向かい合っておにぎりを口に運んでいた。塩の味が口のなかに広がる。

なぜかこいつは豪華な場所にいるほど美味しく感じる。何でだろうな？ おにぎりってこんなに美味かったのか？ セラグリムがスープを飲むスプーンの動きを止めて困ったような顔を向けてくる。

「おにぎりばかりだけど、他のものは食べないの？」

「そう言われてもさ」

「はーはー。そんなことおにぎりが好きなら食べてなさい

」というわけで、おにぎりを食べ続けた。

そして今日食べた数は十一個にも及ぶ。いくらなんでも、こんなに食べたのは初めてだ。

食事と終えると（と言つてもおにぎりしか食べてないが）椅子から立ち上がる。

「じゃあ、やるやう

「あ、ちょっと待ちなさい

セラグリムは、ぱつと立ち上ると、近づいてくる。

まだ何があるのか？

俺の肩にポンと手を置くと、笑顔で言葉を発する。

「ちょっと後ろ向いてみて。」「いじけど

言われた通りにセラグリムに背を向ける。

その瞬間だつた。

背後からなぜか胸を掴まれた。

「ふあ！？ な、なに……？」

「いやあ、セオって可愛になつて思つて

可愛いと思つたからこいつなるのはおかしくないか…？

何だ？ 僕ピンチなのか？

顔が熱くなつていく気がする。

いやいや、国王がこんなことしたらダメだろー！

「ちよつ、何するんだよ？ 僕の胸なんか小さこにし触り心地良くな
いだろ……」

「そんなことないわよっ。」

「あぬつてー。」

その時扉が大きな音を立てて勢い良く開き、エルナが姿を現した。

「国王様、何してるんですか！」

「あ、あら？ エルナいたの？ じょ、冗談よ

焦つた様子で俺から離れるセラグリム。

何かもうエルナが救世主だよ。もう少しで取り返しのつかないこ
とにならうだつた。

エルナが申し訳なれそつに頭を下げる。

「すみません、セラさん。国王様は、すぐこんな事件を起こしてしまつたです。悪気があるわけではないので許してあげてください」

事件について語りつかなか?

「だ、大丈夫だって。怒つてはないし」「むー、セオ可愛いのにねえ」

残念そうに咳くセラグリム。

やめる。可愛いって言わないでくれ。

エルナは慌ててセラグリムの背中をぐいぐい押す。

「ほり、国王様、ハーレムの方が待つてますから行きましょーう!」

「あ、そうだったわね。セオちゃんに振られた傷を癒すために今日も一発」

「やりすぎないでくださいよー。ハーレムの方意外はやつちやいけません!」「はいはい」

何て下品な会話なんだ。

少なくとも未成年の前で堂々としていい会話じゃないはずだ。

まあ、助かつたしいいか。

俺は一人のやりとりを尻目に静かに部屋を出た。

エルナに感謝しつつ。

「はあ……疲れたな」

ただ夕飯食べに行つただけなのに。長つたらしく薄暗い廊下を歩きながらため息をついた。冷たい風に思わず身震いする。

息を吐くと白く濁つて夜風にさらわれて消えていく。

部屋の扉の前で足を止め、ドアノブを回す。扉を開けるとなかに

入り、ベッドに寝転んだ。

その時、扉がノックされ、開く。

姿を現したのはラゼルだった。

俺は慌てて起き上がり、問いかける。

「な、何の用だよ」

「僕には記憶がないと言いましたよね？」

「あ、ああ」

「はつきりと記憶はないんですが、以前に好きな人がいたような気がするんです」

ラゼルの言つてることば、恐らく前世 桜下リナだった時のことか？

桜下リナの好きな人……。

俺は、彼女が誰を好きなのかは知らなかつた。

「僕は、ケンカをしたことがあつた気がします」

友達だつたわけじゃないし、俺が一方的に知つてただけなんだけど、桜下リナは小学生の時は正直おしとやかとは言えなかつた。

クラスの男子とよく言ひ合つたりケンカをしたりしていた記憶がある。

少なくとも、高校生の時のようにモテるような状態ではなかつた。

「それで、ケンカに負けて怪我をしてた僕に絆創膏を貼つてくれた女の子がいるんです。その子のことが好きだった気がします」

「…………」

まさか？

「女の子、か」

「はい、女の子です」

「女の子？」

「はい、恐らく」

「女の子……」

「どうしましたか？」

「いや、別に……」

俺の思考は、一つの可能性を探りあてていた。

桜下リナの好きだった女の子。

絆創膏を貼つてくれた……。

俺は、まともに話したことはなかつたけど、絆創膏貼つて逃げたことならある。

もしかして 前世の俺を女の子だと勘違いしてたのか？

確かに、小学生の頃は女の子だと間違えられることもあつたけど

！ あつたけど。

「ラゼル、その子多分女じゃない」

「え？」

「だから、その子多分男」

「セオさん？」

これは、これで嬉しい事実だ。
女の子だと思われてなれば。

「ああ、そういうことですか」

ラゼルは、にこりと笑う。

意味を察したのか？

てかずつと女の子だと思われてたのか。

告白した時はもう別人だと思われていたのは間違いなさそうだ。

「思い出したのは、そこだけか？」

「はい。何となくですが、もうこれ以上は思い出さないよいな気がします」

それは良かった。

俺が告白したとか思って出されたら最悪だしな。

「一つ、お願いがあるんですねがよろしくでしょうか？」

「いいけど」

「……やつぱりいいです」

「何だそれ？」

思わず首を捻った。

何で急に用件を言ひのをやめるんだコイツは？

「おい……つて！？」

声をかけようとした時には、ラゼルはベッドの上で眠っていた。眠たかったから言ひのやめたわけじゃないよな？

てか、ここ俺のベッドなんだけど！？

俺、どこで寝たらいいんだろ。

ソファ、かな？ あはは。

本当は布団被つて心地よく寝たいよ。

でも、コイツがいる限りは。

床に蹴落としてベッドで寝るのもありかもしれないけど、眠つている相手にそんなことができない。

頭を抱えた。

暖かい布団に潜つて寝たい。でも、これは。
この際だから、コイツの部屋まで行つてベッドを借りるか？
や、でも人のベッド……しかも男のベッドで寝るなんて無理だ。
うん、ソファで寝よう。今日は我慢するしかない。

朝、太陽の日差しで目が覚めた。

あれ?
暖かいなあ。

昨日はソファで寝ただけど、身体の上に布団がある。誰かがかけてくれたのかな?

とか思つていいと視界がはつきりしていく。ん？ ベッドの上じやないか？

慌てて起き上がる。

何で一人でベッド使ってるんだよ！？

昨日、俺はソファで寝たはずだよな？

そうしていると、ラゼルが眠そうに目を擦りながら起き上がる。にこっと朝から爽やかな笑顔を浮かべる。

「あ、おせむじや二番目」

「なななな何でつ！」

「夜中に用が覚めて、

「ベッドに移したつてか？」

「はい」

「お前、自分の部屋戻れよ！？ 何で一緒に寝るんだよ！？」
「すぐに眠くなつたので」

ダメだコイツ。

言つても通用しない。

まあ、別に何かされたわけではないし、子供のお泊り会とでも考
えれば。

……男女二人でか。

元桜下リナだから、害はないはずだ。

そうだ。相手は元美少女だ。

こう考へると、何か全然平氣な氣がして
来ないじやないか！

中庭に咲き誇る花々を眺めながら白いテーブルに肘をついていた。太陽の光が光の帯となつて花々に降り注ぎ、輝きを放つてゐる。空を仰ぐと青と白のグラデーションが展開してゐる。

何て言うか、戦争してるとは思えないほど平和に思える。町も賑やかだし、暗い顔してゐる人はほとんど見かけなかつたし。明るい国なんだな。

まあ、暗い雰囲気が漂つてゐるよりは明るい方がいいんだけどな。しかし、町なんかは襲撃されたりしないのか？

「あ

俺はふと、ある疑問を思い出した。

自分を転生させたのは誰なのか。それが気になつて仕方がない。別に会つて文句を言つつもりじゃないけど。

セラグリムに聞いてみるしかないか。

椅子から立ち上がり、中庭を後にした。

王室に到着すると相変わらず豪華な椅子に腰掛けるセラグリムの姿があつた。

セラグリムはこつちに氣づくとこつと微笑む。

「あら、何かしら？」

「とりあえず昨日のことは忘れよ。うん、その方がいい。考えると恐ろしくてたまらない。

「俺を転生させたのって誰なんだ?」「それね……」

セラグリムは立ち上ると、奥にある金色の引き出しを開けた。探つて小さな鍵を一つ、持つて来て差し出してくれる。鍵を受け取つて俺は眉をひそめた。

「これは?」「これを持って町外れの一軒家に行きなさい。そこにはいるわ」「何で鍵を?」「どうせ呼び出しても出て来ないでしょうし、鍵もかかってると困るから」「それは、勝手にこれで開けろってことか?」「ま、そうね」「ま、どう奴なんだ?」「呼んでも出て来ないとか呑き?」もりか?

「あ、場所はエルナに案内をせるわ」「ああ」

ぽかぽかした陽気が気持ち良いな、町はずれに続く草原を歩い

ていた。

草原の草花は太陽の光を反射させ、輝いている。

軽やかな足取りで歩くエルナは、にこにこと上機嫌に笑顔を浮かべていた。

「外は気持ち良いですね」「そうだな」

沈黙。

それ以上、何を話せばいいか分からない。

俺つて自分から話題を振るのが案外苦手なのかもしれない。

それにも、どんな奴なんだろう。

俺を転生させたのは。

あの声からして女みたいだつたけど。

しばらく歩き続けると小さな家が見えた。その家はかなり変わつていた。

見た目がプリン。

いや、何言つてんだつて感じだけど本当にプリン。

プリンみたいな独特な形で黄色。ご丁寧に屋根の部分は茶色だつた。まさにプリンとしか言ひようがない。

ホントにこれ家なのか？

何かのオブジェクトではないよな？

ちゃんとドアや窓はついてるみたいだし、どうやら本当に家らしい。

「こんなにちはー、ミルさーん」

エルナがドアをノックするが反応はない。ドアノブに手をかけ、回してもドアは開かない。鍵がかかってるみたいだ。

「じゃあ、これを」

セラグリムにもらつた鍵をポケットから取り出して、鍵穴に差し込んだ。

鍵を回してから引き抜き、再びドアノブを回すとよつやべドアが開いた。

なかへ入ると、黄色の壁が田に飛び込んできて田がチカチカして思わず目をこすつた。

「何なんのでよく生活できるな？　俺だつたらおかしくなりそうだ
「そうですね。私も耐え難いです」

エルナが苦笑いを浮かべて肩を竦める。

てか本当に生活にくそだよこれ。慣れるといつでもないのか？

奥へ進むとソファに腰掛けた少女がいた。

緋色の髪を肩まで伸ばし、その背には白い羽を持つ少女。

「あ」

「」「めんなさー」

少女はびくつと身を縮めておずおずとした様子でこちらを見た。

泣きそうな顔で謝罪の言葉を述べる少女。

「この子が俺を転生させたのか？」

多分、謝罪の言葉は俺に対して。

「セオさん、この方が転生術を操るリーファさんです」

俺はじつとリーファと呼ばれた少女を見据えていた。

このリーファが俺を転生させたのか。

リーファは申し訳なさそうな顔でこちらの様子を伺っている。

そしてまた口を開く。

「いめんなさい……」

やせっぱつ出てきたのは謝罪の言葉だった。

「「めんなさい」

リーファは、申し訳なさそうな表情で頭を下げるばかりだった。
正直、戸惑った。

俺は、勝手に転生させられたことを少なからず不満に思つてはいた。

急にあつちの世界の人生を奪われて、家族とも友達とも会えなくなつたから。

俺を転生させた本人に会つたら、一発ぐらい思いつきりブン殴つてやろうかとも思つたてぐらいだ。

けど、目の前で必死に謝り続けるリーファの姿を見るとなな考えは消し飛んでしまつた。

「「めんなさい。私、私が」」

「い、いや、そんなに謝るなつて」

「え？」

俺の言葉に驚いたのか、リーファは目をぱちくりさせながらじつとこちらを見つめていた。

えーと、こいつははどう対応したらいいんだろ? 俺は人付き合いはうまくないし……。

……とりあえず、笑顔か?

というわけで、笑顔を浮かべてみた。

「もう終わったことだから、大丈夫だよ」

大丈夫だよな?

自然な笑顔になつてゐるよな？

女らしく可愛くとまではいかなくとも……といふか、いきたくな
い氣もするけどさ。

失敗した時にやりつて感じになつてないよな？

「あ、あの……」

戸惑いがちにリーファが口を開く。
ま、まさかにやりつてなつてゐるのか？

うん、それは注意しにくいよな。

盛大に笑顔作りに失敗とか最悪だよ畜生……。

「な、何で大丈夫なんですか？ 私は、私は……あなたの許可もな
く勝手に転生させたんですよ。あなたは、私のことを責めてもいい
んですよ？ なのに、何でそんなに優しいんですか？」

「この子、良い子なんだなと素直に思つた。

自分が悪いと思つてゐる。

きっと、どうしても転生させなきやいけなかつたんだろう。

あの時、声が聞こえてた。

ずっと謝つてた。

でも、やらなきやいけなかつたんだ。

それなら、この子は責められるべきじゃない。
そのはずだ。

「俺は心が広いからや」

「うん、広いはずだ。」

「あ、あ、ありがとうございます！ やオさん

リーファはぶわっと涙を流しながら抱きついてきた。
てか、この子可愛いな。

いや、恋愛的な意味じゃないんだからな?
俺には 誰もいないけど。恋人とかいなけど!
何て言つか、ペットみたいな感じだ。
つむぎ……。

「あ、エルナさん」
「お久しぶりです、リーファさん」

エルナは丁寧にお辞儀をして、リーファもそれに習つて頭を下げる。

俺は立ち上がる。

「じゃあ、そろそろ行くか」
「行くの?」

リーファが不思議そうに首を捻る。

「ちょっと顔見に来ただけだしさ。別に文句言いに来たわけでも……」

「あの、待つて」
「え?」
「私も行く」

リーファは真剣な表情で告げる。
目を丸くしてリーファを見た。
リーファは家から出ないんじやなかつたのか?
セラグリムは確かにそう言ってたと思うけんだけど。

「私も何か手伝う……」

「そ、そうか。ありがとな。じゃあ、行こうか」

リーファは立ち上ると、面白いほど素早い動きで荷物を集めて上着を羽織った。

エルナが可愛らしい笑顔で告げる。

「セオさんは人に好かれる天才ですね？」

「イマイチ意味が理解できないんだけど……」

第十一論（前書き）

短めです。

リーファを連れて城に戻ると、とりあえず中庭のテーブルを囲んでお茶を飲んでいた。

鮮やかな青い空の下、心地よい風が花壇の色とりどりの花々をゆっくりと揺らしている。

リーファは可愛らしい仕草でずずっとお茶をすすっている。そしてテーブル中央に置かれた皿に盛つてあるクッキーをかじる。そんなリーファの様子を眺めながら俺もお茶をすする。

「リーファは何者なんだ？」

「私は……」

リーファはコップを置き、口を開いた。

「賢人族」

「賢人族？」

「賢人族は、特殊な魔法の知識を数多く持つてるの」

「特殊か……」

と言ふと、転生とかさせられるような。

多分、転生だけではないだろう。他にも何があるだろうし。何かは想像もつかないけど。

リーファはこちらの様子を伺いながら、おどおどと口を開く。

「賢人族は転生術を扱える唯一の種族なの。この世界で死んだ人を転生させて、新しい人生を歩ませることもできるし、あなたのように異世界の人を強制的にこっちに転生させることもできる。け、賢人族はもうほとんどいないの」

「何で？」

俺が首を傾げるといーファは俯き、暗い表情になった。
あ、もしかして。
ほんどのないつて言つと、やつぱりアレだよな。もう絶滅寸前
とか明るい話じやないだうし、悪いこと聞いたかな。
慌てて頭を下げた。

「ごめん。俺、何も知らなくて……」

リーファは顔を上げると首を左右に振つた。

「ううん、いいの。セオは知らなかつたんだし、それに すぐに
言つつもりだつたから」

一回言葉を区切り、

「実は、デファレフ王国にみんな捕まつてるの。賢人族は、少人数
の一族で全員で三十人ぐらいしかいない。一つの集落でみんなで暮
らしてたんだけど、賢人族に戦いで死んだ兵士を転生させて何度も
戦わせるらしいの」

「それは」

「そんなのつてないよね。みんな捕まつちゃつたし、何度も死んでも
転生させられて戦わなきやいけない兵士さんも」

俺は自然に口走つた。

「俺が助けるよ。リーファと同じ賢人族の人達を。絶対に連れて帰
つてみせる」

リーファはしばらくキヨトンとした様子で俺の顔を見つめた後、満面の笑顔を浮かべて頷いた。

「うん。じゃあ、お願ひします」

「うん」

俺も笑顔で頷いた。

リーファを連れてピカピカの薄暗い廊下を歩いているとラゼルとばつたり出くわした。

ラゼルは不思議そうにリーファを見た。

「セオさん、その子は？」

「リーファって言って賢人族なんだつてわ」

「なるほど。よろしくお願ひします、リーファさん」

ラゼルはにっこりと笑った。それに合わせてリーファも笑って、

「お願ひします」

「リーファさんは何をやるんですか？」

「それは……」

リーファはしづらく考え込み、やがて口を開く。

「何か役に立つことをします」

「わうですか」

何かって何なんだろ？ もしかして、思いつかなかつたのか？ まあ、深くは考えないよううにしよう。それでも、強くならないとなあ。強くならないことには、戦争でも勝てないしリーファの一族を助け出すこともできない。

できるだけ早く、強くなりたい。

田を覚ますと窓の方へと視線を移した。

大きめの窓の向こうには、鮮やかなブルーの空と高く昇った太陽が見える。

もう太陽が上がってるんだなあ。

そう思いながら、ゆっくりと上体を起こした。

「ん？ あれ？」

もう朝じゃないか。この明るさだから、早朝つてことはまずないよな？

ベッドの隣の小さな棚に手を伸ばし、丸いガラスの時計を手に取つて時計の針を凝視した。
針はもう十一時を刺していた。

「う……もう朝じゃないか……」

まさかこんな時間まで田が覚めないとほ。もう少し生活習慣を見直すべきかな。

ベッドから降りて着替えて、脱いだ寝巻きをたたんでベッドの上に置くと部屋を出た。

廊下は静まり返つていて、少し肌寒い風が吹いていた。城つてのは無駄に広いから近くに誰もいないと幽霊でも出そつた気がしてくる。

一人だと話す相手もいないもんだから、歩く度に足音だけが廊下に響く。

ただ歩くだけもなんだから、思考を巡らせてみた。

俺はびりやつて戦おつ。

戦争。

それが今、自分の前に立ちはだかってる問題だ。

この世界に転生したのは戦争で戦うためなんだから、やつぱり戦わなきやならない。

でも、俺には戦争の経験なんかない。元いた世界にも戦争は存在はしていたけれど、俺の住んでいるところでは戦争なんか起こっていなくて巻き込まれることなんて絶対になかった。

だからこそ、どうすればいいのか分からぬ。

戦争って言つなり、やつぱり敵国の人とかを殺さなきやいけないのかな。

でも、殺すのは嫌だな。できれば話し合ひとかで何とかしたい。まあ、敵のなかにも話し合つてくれる人や相手を殺したくないと

思つてゐる人もいるだらうけど、逆に話になんか耳を傾けない相手も山ほどこゐるわけで。

そもそも、話し合いで済んだら戦争になんかなつてないよな。戦いたくないから戦わないといつわけにもいかない。

何もしなかつたら、この国がどうなるか分からぬ。

この国に来てそんなんに立たないけど、仲良くなつた人とかもいて思ひ入れはあるし。

俺は窓から空を見上げた。

「……やつぱり、戦うしかないのかなあ

ないんだろうな、きつと。

「セオさん

「あ、おまみつ」

俺がそつ捺拶するところ、ゼルは苦笑いを浮かべて言った。

「おまよいつって、もつ廻ですよ~」

もう言られて俺はむつとした。

「俺は、今起きたからおまよついいんだよ
「そうですか。ところで、セオさん」

「なに?」

「少しここから出ませんか?」

「ん? 町の方にでも行くつてこと?」

俺は首を傾げた。

出ると言つてもこないことがある。中庭に出てゐるのか、城から出て町の方へ行くのか。

「はい、では町の方に行きましようか」

違つたらしい。町の方へ行く予定じゃなかつたみたいだけど、俺が言つたから変更つて感じだな。
何か悪いことした気がする。

ラゼルの後に続いてコンクリートの道を歩けながら周囲の建物を見回した。

普通の一軒家や、レストランや服屋、武器屋とかいろいろなものがあつた。

そう言えば、この世界に来てから何か買つたこととかなかつたよな。

食べ物は毎日食べてるけど、小物とか本とか。あ、でも本とか読めるかな。

やつぱりこの世界とあつちじや文字も違うだらう。

その辺りは勉強しなきやいけないのかな。

もしかしたら、転生した時に文字が読めるようになつてるかもしれない。

その方がありがたいんだけどな。

今から勉強つてのも何だか、覚えられる気がしない。

てか、戦争中なのに賑やかだな。

すれ違うは人達はみんな楽しそうだし、これで戦争してるとか本気かよ。

あ、一般人はまだ知らないんだつけ。

それなら知る前に戦争が終わればいいよな。

「何か欲しい物はありますか？」

「欲しい物……」

俺は近くの店を見回してみたけど金を持つてないことに気づいた。

「金持つてないからいいよ」

「よほど高い物じゃなかつたら買つてあげますが……」

「ば、バカ。俺は子供じやないんだぞ」

その調子で断ろうとしたけど、近くの屋台で焼かれているパンみたいなやつに視線が釘付けになつた。

「い、いや……子供じやないけど……あれとか食べたい」

ラゼルにパンを買つてもうつて、ベンチに座つて食べることにした。

袋に詰められたパンを手に取り、かぶりつく。

ふわふわした食感で外は少しカリつとしていて甘さがあつて美味しかつた。

「うまいな」

「そうですか」

ラゼルはにっこりと笑つた。

それにも、何を話せばいいのか分からぬ。

何て言うか、うまく会話を繋げられないんだよなあ。

ラゼルは話しくい相手ではないし、むしろまだ話しやすい方なんだけどな。

沈黙に耐え切れずに空の袋を持つて立ち上がつた。

「この袋、捨てるよ」

「はい、分かりました」

少し歩き、ゴミ箱に袋を突っ込んだ。
にしても、何話せばいいのかな。
ちょっとここで考えてみよう。

「ん？」

ふと、人影が見えた。

町の方へ向つて歩いている人影。ただ、観光客や町の住人とはとても思えないというかそもそも人じやなかつた。
機械みたいなもので、動いてた。
何か大砲とかついてる。

「……あれ、やばいのか？」

あんな機械が町に行つて大砲とかぶつ放したりしないよな。
いや、でも戦争中なんだし敵国が変な機会とか送り込んでできたり
なんてことがあるかもしない。
止めた方がいいかもしない。

「……やるか」

俺は手をかざしてウインドウを表示すると《炎豪刀》をタッチして出現させる。

目の前に現れた炎豪刀を握ると機械兵の前に立つた。

機械兵は俺の存在に気づいたようで赤いランプを光らせて大きな音を鳴らした。

炎豪刀を構え、機械兵が突っ込んでくるのを待つ。

機械兵は、まっすぐと二つに向って突進してくる。

俺は炎豪刀で機械兵の体を止める。

金属どうしがぶつかり合い、赤い火花が飛び散る。

機械兵の突進は想像していたよりも強力で気を抜くと吹き飛ばされてしまいそうだった。

機械兵を止めていると、正面の大砲の窓が開き、かすかな光を放ちはじめた。

「……っ！」

まずい。

これは多分、何か砲撃でもしてくる気だろ？

このままいたらもう攻撃を喰らうことになるだろ？

素早く炎豪刀を下げ、距離を置いた。

機械兵の大砲は青く輝き続け、ついに強力な砲撃を放つ。青い光の線に当たらないように身をかがめた。

それが消えるとすぐさま立ち上がり、機械兵の背後へと回りこんで炎豪刀で斬りつける。

大きな金属音が響いたが、機械兵には傷一つついてない。

次に炎豪刀に炎を宿らせて思い切り振り下ろす。

炎を宿した刃は機械兵を切り裂き、内部の核と思われる丸い玉が見える。

躊躇いなく炎豪刀でそれを突き、割る。

核が碎け散ると機会兵は赤く光を放ちはじめる。そして大きな大爆発を起こす。

大きな爆発音が響き渡り、地面を揺らす。咄嗟に距離を置こうとしたけど間に合わず、吹っ飛ばされた。地面に転がつてうつ伏せになつた。

「うー……」

特に大きな怪我はしなかつたが地面に身体を打ちつけたことでダメージは喰らつた。

機械兵のいた方を確認すると機会兵は粉々に碎け散つていた。多分壊れたんだよな？

ほつとした。

もし、壊れてなかつたらこの状態じゃ戦うのも不利だつただろうし。

安心していると、音が聞こえた。

「……まさか」

一体だけじゃなかつた。

今來たらしきもう一体の機械兵がこちらに近づいて来る。

「へや……」

まづい。

起き上がるうとするが身体が痛む。

不意に青く輝く閃光が機械兵を切り裂いた。真つ一いつに割れた機械兵は大きな爆発を起こして粉々になる。

「え？」

見上げると青い剣を持つラゼルが立っていた。
俺はようよると起き上がる。

「ラゼ」

コツンと頭を叩かれた。
結構強烈な一撃で俺は思わず頭を抱えた。

「な、何するんだよ

睨みつけてみたけど、ラゼルの不機嫌そうな表情を見て黙り込んだ。

「何だ？ 怒ってるのか？
もしかして俺、何かしたのか？ した？」

「どうして無理をしたんですか？」

「べつに無理なんて……」

「機械兵と戦うのも一旦戻つて僕を呼んでからでも充分間に合つた
はずです」

「だつてすぐ止めないとつて……」

「言い訳はしないでください。もう知りませんから」

ラゼルは立ち上がると歩き出した。

取り残された俺はしばらくポカンとしていた。

「…………うひ、何も怒らなくていいじゃないか。うー……」

あれ？ 何だろ。目から水が出てきたよ。べつに辛くなんかないんだからな。

怒られたぐらいで。

「う、うひ……あのバカあ……もう帰らないからな

その場にうずくまつた。

空が黒く染まって小さな星が輝き始めていた。

周囲も真っ暗で周りの様子がよく伺えない。

冷たい風が吹き付けるなか、今だにうずくまつっていた。

「…………

何がすごく虚しい。

もう帰りたくないつてきたけど、自分から帰るなんて嫌だし、負けたみたいだし……。
涙が止まらない。

「セオさん」

声が聞こえて上を見上げるとラザルがいた。

「何の用だよ」

「ここまで」「ここの」の氣ですか？ 帰りましょひ

「やだよ」

「……分かりました、じゃあずっとここにいたらどうですか？」

「ま、待てって！ お、お前がどうしてもって言つなり……」

「では、どうしてもとこつ」とぞ

「しょ、しょうがないな……」

城に帰ると広間の赤いソファに腰掛けた。

一息つくと口を開く。

「お前のせいで疲れ……何でもない」

流石にまた怒らせたりまずいだらひし、言ひかけて黙つた。

「セオさん、今度から無理はしないでくださいね」

「分かったよ」

頷いておへ。

「あと、話があるんですけど」

「話?」

「はい、ストレートでいいですか?」

「す、ストレート……?」

何の話だよストレートって?

「そ……その……ストレートって? できれば俺は手加減してくれた方が嬉しいって言うか……」「す、ストレートはダメですか」

苦笑いを浮かべるラゼル。

ところで何の話なんだろ?

話の内容によってストレートとかも威力が変わってくるけど。

「…………」

じつとラゼルの様子を伺つてみる。

「……皿を開じて貰えますか?」

「皿?」

とりあえず閉じてみる。

額に柔らかい感触が。これは?

「……今日はもう休んだ方がいいですよ。では

「え? ちょっと……今何したんだよ?」

おでこにキスか?

ガキつぽい真似だろ絶対。

ストレートだとかキスの話だつたのか?
ん? キスつて普通しないよな……? 友達とかにするけどじや
ないばず。

「う……そ、その……これってどういuff……」

顔が熱くなつてきた。

相手が元桜下リナだけに余計に……。

「早く寝た方がいいですよ

ラゼルはにこりと微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7098x/>

べ、べつに異世界に転生して女の子になってハーレム作りたかったわけじゃない

2011年12月16日21時17分発行